

三十五、篠栗の劇場

新しい年を迎えると、テレビでは特別番組が真っ盛りですが、その中で歌舞伎などの伝統芸能の番組を目にしたことはありませんか。伝統芸能の番組は、新春に限らず放映されていますが、いつもよりきらびやかな衣装を身にまとっているように思いませんか。こうした伝統芸能が演じられる劇場は、東京では歌舞伎座、京都では南座などが有名です。

福岡県では、福岡市の博多座はもちろんのことですが、歴史のある劇場として、飯塚市の嘉穂劇場もよく知られています。現在の嘉穂劇場は、昭和六年（一九三一）に建てられ、今でも現役の劇場として活躍しています。一〇〇四年にクリエイト篠栗で小道具などの企画展が開催されましたので、御存知の方も多いと思います。

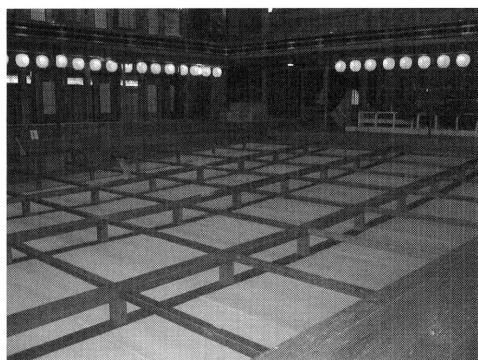
こうした劇場が、昔、篠栗町にもあったことを知つ

生館開場の際には、貝島鉱業の社長の援助があつたようだといわれているように、大正座と明治鉱業にも何らかのつながりがあつたのかもしれません。

現在まで、大正座の様子がわかる写真が見つかっていませんので、詳細な確認ができていませんが、外観は瓦葺きの木造二階建、内部は回り舞台や花道、囃子部屋などがありました。舞台正面にマス席を持つ



八千代座(熊本県)



八千代座のマス席

大正座の定員は四八六名（嘉穂劇場は一二〇〇人）と、大規模ではありませんでしたが、機能的には他の劇場と比べて遜色のないものでした。

篠栗町歴史民俗資料室では、大正座に関する情報を求めていました。「大正座の写真を持つてるよ」や「誰々を見に行つた」など何でも結構ですので、よろしくお願いします。

載されていませんでしたが、「福岡日日新聞」大正八年九月二十九日号の「みもの、きもの」欄には、「糟屋郡篠栗 松島家松鶴節劇（廿九日迄）」と書かれています。もしかしたらこの節劇も大正座で行われたのかもしれません。

また、少し年月が下りますが、「福岡縣統計書」によりますと、昭和十一年には、年間に二三五日もの興行が行われ、一日平均二六五人が来場しています。

まさに、大正座は篠栗の娯楽を背負っていたと言つても過言ではなかつたようです。

ていますか。この劇場について西義助著『くらしの四季』（昭和五十七年刷）を参考にしながら、先日行つた聞き取り調査の報告を交えつつ記していきます。

大正八年、篠栗に劇場が誕生しました。名前は、「大正座（たいせいざ）」と呼ばれました。（大生座という説もあります）場所は、篠栗駅前付近です。今でこそ、

みなさんは「篠栗に劇場があつて、お客様がたくさん入るのか」と思うでしょう。確かに、この時代は篠栗線は吉塚から篠栗までしか開通していないため、筑豊からのお客さんは見込まれず、一方、福岡には九州劇場など既に大きな劇場があるため、汽車に乗つてお客様がやつて来るとも思えません。しかし、この頃の篠栗は石炭産業により発展の途上にあつたこと、また、現在と違い、娯楽が多くなかつたことから篠栗近辺だけでそれなりの数のお客さんを呼ぶことができたのでしょう。大正座の開場が明治鉱業株式会社の篠栗進出（大正六年）以降だつたことからもう思われます。大正座と明治鉱業の関係は不明ですが、宮田町（現宮若市）の活動写真常設館（映画館）大